

高等学校家庭科教師から見た住居領域の位置づけ

○山崎 古都子*, 北山 友佳子*

*滋賀大

研究目的 : 先学によれば家庭科教育における住居領域については指導が困難な領域という評価が定着しているかと思われる。本研究は住居教育の重要性に鑑み、このような現状を打開し、効果的な手法を見つけることを目的にして、まず、住居領域の教えにくさの構造を明らかにしようとするものである。本報告では、高等学校家庭科を構成している諸領域の中で教師から見て、住居領域がどのように位置づけられているかを明らかにする。

研究方法 : 京都府、滋賀県の公立高校の家庭科教師全員に郵送アンケート調査を1999年10月に実施した。京都府：配票数129回収率20.9%, 滋賀県：配票数162, 回収率27.1%

結果 : 家庭科の諸領域の指導について教え易さ、志向、自信、得意、重視度の5つの指標を使って比較評価を求めたところ、各領域に特徴がみられた。食物領域は5つの指標とも得点が高く教師の属性にも左右されずに評価が安定している。保育領域は食物領域に近い。被服領域は重視度が低く現在の生活を反映している。この3領域に比べて、家族、住居は教え難い領域であることが本調査からも再認された。しかし、家族領域は重視度が極めて高く、一方住居領域は教師の志向性が高いのに反して、重視度が低いという結果となった。社会的重要性と教師の意識の間にギャップがある。実験実習の導入に対する評価は高いが、短い時間内での確かな指導内容が見つからず、また準備時間・費用面で踏み切れないと答えた。従来の実験実習は住宅計画、通風実験などを個別に取り上げる例が多く、住居領域に割当てられた時間内では部分的教材を消化するだけに止まる傾向がある。居住者が身につける必要がある判断力や責任能力を総合的に養う実験実習の開発を求めている。